

コロナ対策で規模縮小

岩木健康増進プロジェクト 今年度健診開始

弘大など

弘前市岩木地区の住民を対象にした大規模な健康調査「岩木健康増進プロジェクト」の今年度の健診が17日、岩木文化センターあそべーるなどで始まった。新型コロナウイルス対策としてプース数や健診項目数を

前年度の約半分に縮小し、15分ごとに6人入館する完全予約制で、1人当たりの健診所要時間も2時間程度に短縮。一時は開催が危ぶまれたが、徹底した「3密」回避対策を講じた新スタイルにより、例年より約3カ

月以上遅れてのスタートとなった。

プロジェクトは2005年度にスタート。弘前大学、弘前市、県総合健診センターなどが短命県返上を目的に疾病予防や健康維持につながる項目を設けて実施しており、世界から注目される健康ビッグデータの基盤になっている。

今回は県外からの協力がスタッフについてはPCR検査や抗原検査を実施し、医師や大学関係者、住民ボランティア、弘大COI参画企業関係者ら合わせて約130人が参加。25日までの9日間で、岩木地区在住の20歳以上の男女536人を対象に健診を実施する。

肌の状態を調べる花王のプースでは前年度より検査

項目を減らし、スタッフも本県駐在社員と地元の保健師が対応。ハウス食品のプースでは、対面式で行っていた味覚に関する検査を、今回は遠隔で実施するなどして対応した。

初年度から健診に参加しているという同地区の無職対馬重逸さん(79)は「健康維持のため健診を毎年楽しみにしているので、今年も実施するののか気になっていた。参加できてよかった」と語った。

同日は、弘前市の桜田宏市長が新たなスタイルの健診を視察。新型コロナウイルス対策を評価した上で「(弘前発の取り組みで)短命県脱出だけではなく健康な街になることを期待したい」と述べた。

弘前大学の中路重之医学研究科特任教授は「岩木地区の方の声に応え、健診継続によるビッグデータの信頼という意味でも対策を取った上で実施することに意義がある」と話した。

(成田真由美)



新型コロナ対策を徹底してスタートした岩木健診で、画面に向かって質問に答える参加者